

作文集 3年生編

笑顔の場 3年 原田優弥

自分はこの島実で、学校は我慢しながら苦しい生活をする場所ではなく、自分らしくみんなで笑い合える場所だということを知った。

小学校6年生の冬、自分の今後の生活に大きく関わる出来事があった。それは「いじめ」だ。いつも一緒に帰っていた男の子の友達がいた。そこに、当時仲が良かった女の子2人組も入ってきた。そこから全てが変わった。

いつも通り4人で帰っていた時、1人の女の子が自分以外の2人と話していた。「なんだろう」と思った瞬間、急に走り出していった。1日のみならず、毎日。そして、学校で理由を聞こうとすると無視される。最初の頃は「我慢すればいつかやめてくれるだろう」と思っていた。が、先に自分の心からパキッと音がして、バラバラに崩れ落ちた。

その日から「学校」という単語にすごく敏感になった。「学校」という言葉を聞いたり、思ったりすると、心が縛られるような感覚になり、その感覚から逃げるように学校へ行かなくなった。行かなくなってから、色んな人から心配の声をもらった。その中の1つに、当時一緒だったクラスのみんなからの寄せ書きがあった。その文を読んで、とても心が苦しくなった。でも、行こうと思うことが出来なかった。またいじめられてしまうかもしれない、学校に行き、教室に入った時のみんなの視線が怖い。そう思ってしまって、一歩が踏み出せなかった。こんな自分が生きていても良いのだろうか。いつしかそんな事を思うようになっていった。母も「学校に行きなさい」と言ってきた。すごく辛かった。行きたくないと言っているのに無理やり連れて行かれそうになった時もあった。あまりにも多く言われたので、行くふりをして、母が仕事に行った後に帰ったことがあった。母は学校に行ったと思っていたのに、本当は途中で帰っていた。それぐらい学校に行きたくなかったし、何より反抗期で、母に言われたことをやりたくないという思いが強かった。最終的には気づかれてしまい、とても怒られてしまった。この出来事をきっかけに、母は何も言ってこなくなった。ずっとそばで見守ってくれた。

それから1カ月ほどたったある日、担任の先生から「保健室でいいし、すぐに帰ってもいいから、少しずつ来てみない？」と言われた。もうすぐ卒業ということもあり、少し行ってみることにした。最初は学校に行き、先生に会って帰るを繰り返していたが、それも慣れ、少しずつ学校に居られるようになった。しかし卒業してしまい、新しい環境になってしまった。先生も違う、雰囲気も違い、とても戸惑ったが、知らない人もたくさんいるし大丈夫だろうと思っていた。が、まだ教室にも行けてなかった自分がいきなり居られるはずもなく、「場所」という空気がとても辛くなったり、給食の時間になると、急に胃が小さくなり、食べ物が喉を通らなくなったりと、嫌なことが続き、中学校も1、2年生ともに1カ月で行けなくなった。

3年生になり、新型コロナウイルスの影響で、6月まで学校にある少人数の教室に行った。最初は、毎週水曜日の午前中だけ行っていた。それもだんだん慣れていき、9月ぐらいに担任の先生から「教室行ってみようか、大丈夫なんかあったら、いつでも先生の所に来てもいいから」と言われた。正直、すごい悩んだ。こんな自分が行っていいのだろうか、うまくみんなと関わる事が出来るのか、など色々思った。でもその時の自分は、先生を頼ることができる、それがとても安心することが出来た。そのまま教室に行った。すると、みんなすごく驚いていたが、仲良く接してくれた。それからは授業の時は、教室でやることができた。

そして時は過ぎ、冬に入った。どこの高校に行こうか迷っていた。通信制の高校にするか、全日制の高校にするのか悩んでいると、先生から「この学校はどう？」と、ある1枚のパンフレット

をもらった。そのパンフレットには、自分と同じ挫折してしまった人とは思えないほどの笑顔が溢れていた。とても興味が湧いた。それが「島実」だ。説明会に行くと、ビデオを見せてもらった。泣いている人がいたり、笑い合っている人がいたり、衝撃がたくさんあった。と同時に「自分もあんな風に笑い合えたらいいな」と思った。本来は人と関わることはとても楽しいことなのだ、思い出すことが出来たビデオだった。

それから自分は島実に入った。一度足を止めてしまった自分でも、自分のスピードで歩いていても大丈夫と気づけたこの学校ならもう一度頑張れると思ったからだ。1年生の最初の頃は、新しい環境に慣れることがとても難しかったが、HR委員長を務め、クラスの意見を一つにまとめたり、クラスの代表としての活動が初めてだった為、代表としての立ち振る舞いや行動の重要性を知ることができた。2年生になると、学校生活にも慣れ、周りを少しずつ見ることができるようになった。この島実の良さを知ってもらえる最高の行事、「自遊祭」の実行委委員を務めた。「クラスの代表」から「学校の代表」になり、見えてきたものが変わった。島実をもっとより良くするには、どうしたらいいのか、これまでの卒業生の方々が、どんな思いで繋いできてくれたのか、1年生の時では思うこともなかったことを、作業しながら楽しく考え、学ぶことができた。2年生の冬、「クリスマス会」という、3年生に感謝を伝える行事があった。そこでは、色々な行事は自分たちだけではなく、地域の方々や、教職員のみなさんなど、色々な人がいて協力してくれたからこそ、できているということや、決めつけるのではなく、一度自分の中にある「当たり前」を一回壊して、新たな意見を周りから取り入れる「スクラップアンドビルド」を学んだ。先輩方が大切に温めた思いを受け継ぎ、この島実がいつまでも安心できる場になるように、最後の一年、ずっと先の未来まで続くように自分のできることをやっていきたい。

前を向いて歩こう 3年 杉浦悠斗

不安、不信、不快、絶望。僕が中学生の頃、考えていたことです。これからどうしていけばいいのか分からない不安。周りの人が自分を見下してくるように感じる不信。誰も自分のことを理解してくれない不快感。そして、こんなことを考えてしまう自分自身に対しての絶望。僕にはこのような期間がありました。しかし時間は待ってくれません。中学生という3年間はあっという間に終わります。中学生生活が終わってしまえば僕に残っているのは進学か今まで通り家に籠るかの2択です。僕は中学の頃とは変わりたいという思いで進学を選び、この島実に会いました。学校見学に来たとき、授業を受けていた生徒の顔がとても楽しそうでここに入学したいと決断し、受験しました。

入学式当日、僕はこれからの学校生活への期待はありませんでした。不安の方が遥かに大きかったからです。勉強、人間関係等、不安しかありませんでした。入学式が始まり、そんな僕を出迎えてくれたのは、鯛でした。僕もよくわかりませんでした。間違いなく鯛でした。先生が被り物をしていました。ずっと考えていた不安がなくなるくらいに驚きました。そしてなんかここなら上手くやっていけそうだなと思えたのです。

下を向き続けている間は黒い影しか見えません。たとえ目の前に光があっても気づくことが出来ないのです。一度だけでいいから勇気を出して顔を上げてみて下さい。現状から抜け出せる方法は必ずあります。

この島実に出会うために色々な人と関わりました。両親、中学の先生、友達、そして島実の先生。この中の一人でも出会えていなかったら僕はこの島実にはいなかったことでしょう。人との関わりを広げるとたくさんの選択肢が表れてきます。その選択の一つの答えがこの島実です。この道に進めたことを僕は最高に思っています。

島実と私 3年 窪野文音

中学2年生で不登校になりました。クラスになじめず、部活ははじめが原因で辞めました。自分に向けられる視線や表情、言葉がとても怖かったです。中学3年生になって最初はクラスに通えていました。でも、2年生の時のせいでメンタルがとても弱くなっていて、いつも周りの目が気になり、学校に通うのが苦痛になりました。また学校に行けなくなってしまった時に担任の先生に不登校クラスを進められ、そこに通うようになりました。クラスに通っていた時と全然違ってすごく心が楽で安心できました。先生方がとても優しく逆に甘えてしまい、学校をサボりがちになりました。進路に悩み、いろんな学校の説明会に参加しました。その中でも島実の説明会は私を何一つ否定しなかったし、とても温かかったです。学校祭の映像で先輩たちが笑ったり、感動して涙を流している姿に心をおされ、ここなら自分もうまくやれる、ここでがんばりたいと思いました。島実を受験して受かり、最初のオリエンテーションは行けませんでした。別の日に学校へ行き、私だけのオリエンテーションをしてくれた時、母には怒られたけど、理事長の角田先生が「全然大丈夫ですよ、よくあることです。」と言ってくれてすごく安心したのを覚えています。入学してから中学の時と同じようにたくさん壁にぶつかりました。学校に行けない日もたくさんありました。余裕がない中自分にあたりたくなくて、自分を責めるかわりに島実を責めました。島実のことは好きになれなかったし、そんな自分も好きになれませんでした。2年生の自遊祭準備期間で自分は変わったと思います。中学の時に1人もいなかった後輩ができて頼ってくれて、困ったらすぐに助けてくれる先輩がいて、人のやさしさにたくさんふれて、学校が楽しい、好きと思うようになりました。だんだん心に余裕ができて自分を好きになることができたし、それと同時に島実のことも好きになりました。自分を変わらせてくれたのは島実だと思うし、もし島実に出会っていなかったら今の自分のようになれていないと思います。私は、自分は1年生の時より人の話に反応してちゃんと笑っているなと感じました。中学の時は人に合わせて笑っていて、愛想笑いが上手いって言われたこともありました。でも最近、先生が面白いことを言った時はありえないくらい爆笑するし、愛想笑いじゃなくて、心の底から面白い、楽しいと笑っていて、すごく幸せだし、成長しているなあと感じました。島実に来て、周りの人の価値観から学んで成長するのではなくて、自分が楽しい、好きって思うことから学んで楽しく成長できていると思います。自分だけじゃ絶対にできなかったことなので、島実には本当に感謝しています。焦らなくていい、おちつくまで自分のペースでいい。大丈夫。今なら自信をもって自分のことが好きだと言えます。